

## 第86回麻布獣医学会 一般演題11

## 慢性肝炎のミニチュアダックスフント2例

三好 紀彰

松山 ほうじょう動物クリニック：愛媛県

## 【はじめに】

犬の慢性肝炎はまれな疾患でないものの、それらの診断および治療は画一的ではなく日常診療で苦慮することも多い。このたび、慢性肝炎と診断したミニチュアダックスフントの2症例について報告する。

## 【症例】

症例1；ミニチュアダックスフント，9歳齢，メス，5.0kg。急性の嘔吐・下痢，食欲・元気消失を主訴に来院。GPT399IU/L，ALP3500IU/L。輸液および抗生物質の投与を行い第5病日より食欲・元気は回復するも，肝酵素上昇は依然変わらず。腹部超音波検査においては著変なし。第40病日に試験開腹および肝臓 wedge biopsyを行ったところ病理診断は「慢性化膿性胆管肝炎」であった。その後プレドニゾロンを0.5 mg/kg, sidにて開始し，徐々にq48h, q72hと漸減を試みた。肝酵素はプレドニゾロンを漸減していく中で減少していき，現在はGPT131IU/L，ALP167IU/Lである。また同時に抗生物質を併用した。

症例2；ミニチュアダックスフント，13歳齢，避妊メス，4.3 kg。検診にてGPT111IU/L，ALP359IU/L。症状は特に認められていないが，腹部エコー検査にて肝臓全域にわたる散在性低エコー所見があり，第

42病日に，試験開腹および肝臓 wedge biopsyを行った。病理診断は「肝炎」であった。同時に行った細菌培養検査は陰性。プレドニゾロンを1 mg/kg 強，sidにて2週間の投与を行い，その後半減して投与を継続している。現時点ではステロイド由来と考えられる肝酵素上昇を認めており，経過観察中である。

## 【考察】

犬の肝疾患は，近年WSABA liver standardization groupによる疾患分類により改善されてはいるものの，この2症例のように実際の病理診断名は様々な表現でなされることが多い。また慢性肝炎の多くは原因が特定されない特発性であり，プレドニゾロンを基本とした免疫抑制療法が用いられるがその反応も予測がつきにくい。さらに慢性肝炎の症状は，食欲低下，嘔吐，pu/pd，元気消失，など多くが非特異的であり症例2のように慢性肝炎でも症状が認められないこともある。慢性肝炎が進行すると肝硬変に移行するため早期の診断と治療が望ましく，今後さらなる症例の集積により慢性肝炎をはじめとした，犬の肝疾患に対する診断・治療における理解を深めていきたい。